

銀行機能の史的展開

小 牧 聖 徳

- 一 序
- 二 銀行機能にかんするハーンの見解
- 三 銀行機能にかんするヒルファアーディングの見解
- 四 銀行機能把握の基本的立場
- 五 銀行機能の史的展開
- 六 銀行貸出に対する当事者の意識
- 七 貨幣資本増加供給の限界
- 八 独占資本による限界

一 序

銀行機能は銀行の活動を経済社会全体の立場において把握せられたものである。銀行の活動が個別的、企業的立場において把握せられるならば、銀行の業務としてみられることになる。したがって銀行の機能は社会的なも

のであって、個別的、企業的な活動である業務と同一のものではない。銀行業務において具体的にあらわれる銀行の活動は、社会的機能として把握せられることによつて、経済理論へ一步近づぐことになる。銀行機能は経済学的な領域へ向うのに対して、銀行業務は経営学的な領域に属するものといえるわけである。もちろん両者は相互に無関係なわけではないけれども、その把握の立場において、個別的企業の立場に立つのか、あるいは社会的全体的立場に立つのかによつて、それぞれ区別することが出来る。銀行の業務であつても、経済社会に対する作用とか影響等についてまで論究せられるならば、それはすぐれて社会的、機能的な領域へ進むことになる。その場合には個々の具体的な銀行業務は能動的業務（授信的業務）、受動的業務（受信的業務）によつて概括せられ、それぞれ経済社会に対する作用とか、経済社会とそれら業務との間の相互關係について論究せられる。それ故にたとえ銀行業務として論じられていても、それが経済社会全体とのつながりで考察せられているときには、實質的には銀行機能としてみるべきである。要するに銀行機能は銀行活動の社会的全体的領域における作用を意味するものである。

ところで銀行の機能については従来から、信用媒介説^①、信用代位説^②、信用創造説^③等が代表的なものである。これらすべてについてみられることは、それぞれ一面の真理をふくんでいることは否定出来ないけれども、それぞれ銀行機能を一面的にしかとらえていないという結果におちいつていることである。すなわち現実の銀行は信用の媒介のみをおこなうのではなく、信用の創造だけをおこなうものでもない。それら両者は共に銀行のおこなうところのものである。なおそのほかにも銀行がおこなっている機能があるのである。にもかかわらず、これら諸機能の把握が一面的なものに終つているということは根本的には、機能把握の方法にたらなる問題であると思

われる。

ところで本稿ではA・ハーンならびにR・ヒルファデーイングの銀行機能にかんする見解の要旨を検討し、それらを通じて、歴史的立場による銀行機能の展開をこころみたいと考える次第である。

二 銀行機能にかんするハーンの見解

ハーンは先ず信用論を二つに分ける。その一つは資本理論的な内容を持つ信用論であり、他の一つは銀行経済的な内容を持つ信用論である。資本理論的内容を持つ信用論の貨幣観は、彼によると「物財資本」の代表者としてのみ考えられて、貨幣は出来るだけ存在しないものとして考察がおこなわれるというのである。だから貨幣は出来るだけ存在しないものとしておこなわれる考察の方法によるならば、第一に貨幣の側の変化が財貨の世界に变化をあたえる点を認識することが出来なくなるし、第二に貨幣市場、資本市場における實際の現象の原因および作用を説明することが出来ない、と彼は論じて物財資本を重視する資本理論的信用論を拒否しようとするのである。つぎに銀行経済的内容を持つ信用論とは彼によると、その貨幣観は支払手段として第一に考えられているというのである。そしてこの立場においては信用市場と財貨の世界との関連はあまり論じられていないと述べ、それ故に広い意味での国民経済的認識は、銀行経済的内容の信用論からは得ることは出来ないし、信用の、特に銀行信用の国民経済的理論は得ることが出来ない」と批判するのである。そして従来の銀行経済的な立場に立つ信用論においては、けっきょく、純粹、私経済的に事物を見て、銀行員および銀行支配人のための銀行活動の教科書として役立つような著述が多く、このような純粹私経済的立場からは、本来、国民経済的な財貨生産に

関する推論はなされないと主張するのである。彼は国民経済的考察には、私経済的な観察を加えあわすことだけではなく、財貨の生産と分配とを取扱わねばならないと主張する。だから銀行信用の国民経済的考察においては、まず銀行の信用授与が国民経済における財貨の在高および分配に対して、どのような結果をひきおこすか。又逆に、財貨界での変化はどのように銀行的および記帳的に、表現されなければならないかを研究しなければならないといふのである。別言するならば、銀行的方策の国民経済的結果、および国民経済的变化の銀行的随伴現象——銀行のバランス・シートにどのように表現されるか——を研究すべきであると彼は主張するのである。

そこで資本理論的内容を持つ信用理論では、貨幣は存在しないものと考えて、物財資本を重視するその結果、財貨貸付というような物々交換経済的観念へ逆戻りしてしまつて、信用取引のためのあらゆる媒介物の極端な度外視、という結果になることを警戒しなければならないと主張し、更に他方では、貨幣をまず第一に支払手段として考へるところの、信用の純粹銀行技術的考察はさける必要があると論じて、新しい方法によつて研究を進めべきだと彼は言うのである。

ハーンのあたらしい方法によると、先ず支払手段としての貨幣を度外視して、貨幣という媒介物なしに信用が与えられる経済を仮定する。この貨幣ぬきの経済は取引がすべて、銀行貸方残高を引渡す方法で行われる経済を意味し、実物貸出を意味するものではないという理由で物々交換経済（すなわち現物経済）でないといふ解している。このような無現金経済から出発して銀行信用を研究するのである。そして貨幣は現実には市場で多くの役割を果しているから、修正的要素として顧慮するといふのである。ハーンはみずからの方法についてつぎのようについて述べている。すなわち「われわれは意識的に事実上存しないところの、また恐らくは非常に長い時の後にはじめ

てなるであろうところの国民経済的一状態を仮定するのである。したがってわれわれがその際とる方法は、今日、通常おこなわれるごとく、過去に属する経済時期の懇切な描写によって現在を正しく認識せんとするかわりに、現存の傾向に応じて構成せられた未来の経済を敘述し、これによって現在の経済を認識せんとする方法である」と。この方法は一つのモデルを設定してそれを媒介として現実理解の手段とするものといえる。ハーンの設定したモデルは無現金経済であり、ここでは銀行が顧客にあたえる信用はすべて小切手勘定の貸方に記入せられ、信用受領者は財貨の購買に際してこの貸方残高を小切手振出の方法で、商品の売手に渡すのである。この売手は受領した小切手―貸方残高―のみずからの債務を返済するか、あたらしい購入をするか、それとも貯蓄をするかを決定するまで、その貸方残高を彼の銀行に静止せしめるのである。このようにして国民経済であたえられる各信用は、信用の方で預金をつくり出し、且、これによってそれを使用するための手段をつくり出すと彼はいうのである。かくしてハーンの有名な言葉がつぎのように引出されるのである。すなわち「銀行の能動的業務は一般的にも又、各個の場合にもそれに相応する受動的業務を惹起すが故に、銀行の受動的業務は能動的業務に対する前提ではない。受動的業務は同時におこなわれる信用授与の反射にほかならない」と。

ハーンは現実を理解するための手段として一応現金経済の領域を度外視して、現金ぬきの経済から出発するという方法をとるのであるが、別言すると現実理解の便宜上、一方をあたまわしにして他のある部分から手をつけるというのである。そのために一つのモデルを形成してそれを媒介として現実を理解するための手段とするものである。モデルを通じて現実を理解しようとする方法を、一応みとめるとしてもその場合に、どのようなモデルを形成するかが問題であるがハーンは無現金経済というモデルを形成しそこから出発するのである。このハーン

の形成したモデルは彼のいうように第一に現存しない社会領域であると共に、第二に遠い未来において実現されると想定された社会である。そして彼は「現存の傾向に依じて構成された未来の経済を敘述し、これによつて現在の経済を認識しようとする方法である」とのべて未来の経済から現在の経済を認識しようとするものであることを明言している。この場合の未来の経済は彼によると「恐らく非常に長い時の後に始めてなるのであらうところの国民経済的一状態（無現金経済^①）」なのである。しかし何が故にまた如何にして未来経済は無現金経済になるのかという点については何ものべられてはいない。ここに説明ぬきの独断性がないとはいえない。ハーンは未来の経済は無現金経済であると断定するために現存の傾向を問題にするわけであるが、未来の経済の想定のためには、少くとも過去を考察し、それと現在とを対比させ、そこに一つの傾向を把握して、それが未来社会へつらなるわけであるから、現在のみの観察で未来社会の一つのモデルを構成出来るはずはない。それにもかかわらず現在のみの観察で未来社会のモデルが主観的に形成されるときには、その未来のモデルは恣意的な独断によるものにすぎないといわなければならない。ハーンの方法では未来社会というものは最初から問題にはならないものように思われる。

彼の方法では、未来の社会から現在の社会をみるということは最初から問題にならないとは思われるが、しかしともかく彼がいう未来から現在をみるということを一応認めるとして、そこに時間的なつながりがみられるようであるけれども、それをもつて歴史的把握ということはもちろん出来ないし、その未来たるやすでに述べたように観念的方法による独断的なモデルとしての無現金経済の社会であつて、根本的には現実性を欠いた観念論的立場に立っているものといわなければならない。

ところで、つぎに無現金経済という想定が一つの理想型的概念であると仮定しても、理想型そのものはまず客観的に可能であることが必要であるもののように思われる。すなわち理想型的概念として思维的に上昇して構想されたものであつても、それが客観的に可能であるということが必要である。商品が存在し、したがつて貨幣も存在する社会で現金なしの小切手のみによる経済は客観的に可能であるとはいえない。そこでそれをば客観的に可能ならしめるために後に現金経済を附加するという方法をとらざるを得なくなるわけである。しかしそれは無現金経済と現金経済との二つの領域の機械的な結合の感が深い。

ハーンの対象としたのはいうまでもなく現実の社会なのであるが、現実理解の方法として観念的に想定したモデルの社会を通じて現実理解を試みようとするものといえる。そのために無現金経済と現金経済とに現実を機械的に分離して把握し、それをまた機械的に結合するという二元的方法をとるわけであるが、現金経済と無現金経済との間には平面的な機械的結合がみられるのみで、現金経済より無現金経済への歴史的必然的なつながりはなし、無現金経済から出発しなければならないという必然性はない。このように彼の方法はその独特の着想はともかくとしても、根本的には観念的、平面的な立場からの方法であるということが出来る。

ハーンは根本的には平面的、観念的方法によつて、通説に反対し、銀行は資金を受入れて貸出すのではなく、いわば媒介的な活動をするのではなく、資金は銀行によつて造出されるものであると考え、能動的業務は受動的業務に先行すると主張するのである。彼の主張はその方法の故に一面において銀行の機能を把握していることは否定出来ないけれども、そのみが銀行機能のすべてではない。彼が信用創造を強調するのあまり媒介的機能を軽視する点は、一面的ないわば部分的な観察であるといえるし、その根源は、彼の考察方法につらなっているも

のといえる。彼の銀行機能にかんする見解は、問題をなげかけはしたけれども、その根本的な観念的、平面的な考察方法にわざわざいわれて、平面的、部分的なものにおわらざるを得なかつたものといふことが出来る。

三 銀行機能にかんするヒルファードイングの見解

ヒルファードイングは銀行機能については、すぐれた要約をわれわれに示しているといふことが出来る。すなわち第一には支払取引の媒介者としての機能。第二には休息貨幣資本を機能貨幣資本に転化する機能。第三には休息貨幣を機能貨幣資本に転化する機能^③である。ここまでは無条件に彼の述べることを承認することが出来る。彼は銀行機能の歴史性については、それをそれ自体としては追求してはいないけれども、信用については支払信用から資本信用へと発展する状態をば、商業信用の銀行信用による代位と銀行信用自体の発展との関連において展開している。すなわち彼においては銀行信用は支払信用から資本信用へと発展して行くのであるが、この場合の支払信用に銀行信用が加わると、資本家相互の知られていない信用が、銀行によって社会的に公信せられた信用によって代位せられることになるのであり、資本信用においては、休息状態におかれた貨幣や、休息状態におかれた貨幣資本が、銀行によって機能貨幣資本に転化されることによって、資本が貨幣資本として銀行によって与えられ、それによって生産手段が購入せられることになるのである。以上の事柄は別言するならば支払信用においては現実資本が手形流通を媒介として銀行券もしくは預金通貨（具体的には小切手）に転化せられるということであり、他方資本信用においては、貨幣、銀行券もしくは預金通貨の形態で貨幣資本がまず、銀行によってあたえられ、それによって企業はあたらしく現実資本を獲得することが出来ることとなるのである。支払信用は

いわゆる「貨幣の貸付」であり、資本信用は「資本の貸付」である。しかし支払信用、資本信用共に銀行は貨幣、銀行券もしくは預金通貨の形態においてそれらをあたえるという点においてはかわらないのである。貨幣、銀行券もしくは預金通貨は「貨幣貸付」、「資本貸付」いずれの場合にも等しく通過しなければならない形態であるし、これらによる以外には銀行は貸出をおこなうことは出来ないものである。この場合貸出の源をなすものは銀行に対して預けられた預金である。ヒルファードイングの言葉によると「経験により銀行は正常時には、それより減ずることのない預金の最低限を知り、そしてこの額だけは何時でも銀行が生産資本家（機能資本家）に融通できるのである。」すなわち銀行預金のうちの滞留分が貨幣貸付、資本貸付のいずれに対しても利用せられることになるのである。ヒルファードイングはこの場合現金貸出によって累積的に生ずる預金増大についてもふれている。すなわち預け入れられた貨幣が貸出され、その貨幣が再び預金として預け入れられ、それがまた貸出されてという具合に、貨幣そのものの貸出の反転によって生ずる預金の増加である。この場合には銀行の手元にある現金に数倍する仮空の預金が成立することになる。

けれども貨幣によらずして銀行みずからの信用によって積極的に造出する貸出については、彼は「危険なしに銀行は自分自身の信用を増加することは出来ない」とのべている。そしてさらに銀行信用に対する需要の増加は「利率を昇騰させる」というのであるが、その信用の増加供給は、どの程度まで可能なものであるのか、すなわち信用によって積極的に銀行がつくり出し得る貸出の限度は幾何であるのか、については追求していない。

ところでヒルファードイングは銀行機能については一見、平面的列挙を試みているがごとくであるが、それが一定の歴史性をもっている点は注目に値するといわねばならない。けれども、銀行による貸付貨幣資本の積極的な

造出機能は、彼においては積極的にとりあげられていない。しかし貸付貨幣資本の造出は、現実にはあきらかに存在をする事実なのである。

この場合において造出される貸付貨幣資本は、資本信用、支払信用のいずれにも充用されることが出来るものであつて、このいずれに対しても、銀行貸出として与えられ得るのである。

銀行によつて供給された貸付貨幣資本が、社会的には資本として充用されても、あるいは貨幣として充用されても、ともにひとしく銀行はそれらを媒介的ならびに創造的に増加供給することが出来るのである。それゆえにヒルファーディングの銀行機能にかんする見解に、さらに貸付貨幣資本の造出機能を附加えて銀行資本の成立および発展との関係において銀行機能を展開しなければならないと考へるのである。

四 銀行機能把握の基本的立場

銀行機能をみる場合に、それが列挙されていることが多い。しかし列挙せられている諸機能の内的な関連が歴史的且論理的に統一されて把握されていなければならぬ。単なる平面的列挙で満足すべきではない。

また銀行機能のなかで特に代表的なものをとりあげてそれ以外の機能は、軽視するか、もしくは無視しようとする場合もある。たとえば信用媒介をのべて信用の創造を軽視するかもしくは無視するか、または信用創造を強調して信用媒介を自明のこととして軽視しようとするものである。このような議論は、銀行の機能については一面的な把握ということが出来る。

そして銀行機能の列挙的な把握でもあるいは代表的な把握でも、ともに平面的に把握せられているならばそれ

は把握の方法においてすでにあやまりをおかしているものといわなければならない。

その認識しようとする対象がたとえ現在の状態であっても、その把握の方法においてあやまっておれば正しい結論に到達することは出来ない。現実には歴史の中の現実でありその意味で歴史的現実である。歴史をはなれての現実には存しない。その意味で現実理解の方法は、現実が歴史的現実であるかぎりには、歴史的論理的方法によって現実を正しく理解されるものといわなければならない。事物を把握するのに歴史的把握を意識的にあるいは無意識的に無視するならば、極めて平面的な把握におちいらざるを得ない。この平面的な把握方法は事物を固定的なものとしてとらえる危険をはらんでいるし、事物が変化をとげながら生成、発展するのをその把握の方法において既に拒否するものである。現実には歴史的に生成、発展して来た成果である。社会についても、銀行についても、その機能についてもそれらはすべて歴史的に生成、発展して来たものである。現実の銀行はその意味で歴史的現実の銀行なのである。このような銀行およびその機能を正しく把握するための方法は、それらが変化をとげながら発展して来たものであるかぎりには、そのようなものとして歴史的に把握するのが最も正しい方法である。この歴史的に把握するということは、銀行およびその機能を、その歴史をさかのぼって分析的にその始源的なものを把握し、そこから論理を展開することであって、そのことは同時に、単純な、本来的な銀行機能から徐々に現在の具体的な銀行機能へ近づくことでもある。ここにいう歴史的な方法はそれと共に論理的な表現と不可分の関係に立っているのである。このような方法によって歴史的現実における銀行機能は正しく理解されるものと信ずる。

したがってまず現在の銀行機能から出発しそれを分析することによって銀行の歴史をさかのぼり、銀行の成立

の過程の中において、分析的に本来的始源的な機能を把握し、そこから敘述をはじめることによって、再び現在の銀行の機能に立ちもどるということになる。ここに銀行機能についての論理的敘述は、銀行機能の歴史性となつてあらわれざるを得なくなる。

すでに述べたような方法によつて、銀行の成立ならびに發展との関連において銀行機能を把握するならば銀行機能は正しく展開されるものと思われるのである。

五 銀行機能の史的展開

銀行機能の史的展開をこころみるためにはその基盤をなしている銀行資本そのものの成立ならびに發展についての要旨をみておかなければならぬ。

商品交換流通の發展が貨幣を生み出し、貨幣は価値尺度機能によつて諸商品の価値を尺度し、同時に購買手段として、時には支払手段として作用しつつ、商品流通とは逆の方向へ商品流通にもなつて流通する。ところで商品流通は商人の出現によつて一段と拡大され円滑化され、商人は商品取扱資本の担い手として商品の売買を手段として富を蓄積する。他方、商品流通とは逆の方向へ流れる貨幣流通の面においては、貨幣取扱業者が貨幣取扱資本の担い手としてあらわれ、貨幣流通にともなう技術的不便さをとりのぞく作用をする。たとえば両替商は貨幣取扱業者として異国の貨幣を両替して貨幣流通の円滑化をはかり、そのことによつて商取引をば円滑化、拡大化する。さらに代金の受取、支払、保管、決済等貨幣流通にもなつた技術的な諸操作が、貨幣取扱資本によつて集中的に代行されるようになる。ここにおいて貨幣取扱資本はその業務を通じて貨幣流通を円滑ならしめ拡大化し、

貨幣流通の円滑化、拡大化は、逆にその基盤をなしている商品流通に反作用して、貨幣流通の円滑化、拡大化を原因として、商品流通が更に拡大、発展することとなる。このように商品流通と貨幣流通との間の、および商品取扱資本と貨幣取扱資本との間の交互的な作用を通じて、商品取扱資本、貨幣取扱資本の活動領域が拡大して行くこととなる。この貨幣取扱資本こそが銀行資本となって開花し、金融資本となって実をむすぶ資本の端緒をなすものである。

銀行資本へ発展して行く貨幣取扱資本も、その当初は貨幣流通の技術面の担当者として、あらわれたにすぎないのであるが、後に両替、保管、受払を通じて預った貨幣を、貸出に利用出来ることを経験を通じて知るに至って、貸付業務を行うようになる。ここに貨幣取扱資本に貸付資本が結合することとなり、両資本の結合において銀行資本成立への第一歩がふみ出されることとなる。

この場合の貸付資本はふるい貸付資本すなわち高利貸資本としてではなく、あたらしい貸付資本として別言すると商業資本、産業資本の要請にこたえて、商業、産業の発展を促進させるべき貸付資本として、高利貸資本にとつてかわるべきものとして生誕したのである。その意味で従来の高利貸資本とは異なつたあたらしい貸付資本として銀行資本はとらえられなければならない。^⑧

銀行資本は発展をたどるうちに、貸付資本が貨幣取扱資本にくらべて相対的にその重要性を増大するに至り、あたらしい貸付資本として、貨幣を積極的に蒐集して、それを貸付けると同時に、信用貨幣（銀行券、預金通貨）をばつくり出して、社会に供給し、高利貸資本にとつてわかつて貸付資本の支配的な担い手となつて発展への道をたどつて行くのである。それともなつて資本主義社会は商業資本の優位する時代より、産業資本の優位する

時代へと發展をつづけて行くことになるのである。

以上みたように、銀行資本は貨幣取扱資本と貸付資本との結合において成立するが、貨幣取扱資本こそが銀行資本の端緒をなすものである。その意味で銀行機能としてはまず第一に、貨幣取扱資本の機能をあげなければならぬ。貨幣取扱資本は貨幣流通の技術的な面すなわち貨幣の両替、受取、支払、保管、決済等の操作を、商業資本、産業資本のために代行するものとしてあらわれる。ここに銀行機能の第一として、貨幣取引を媒介し支払取引を促進するという機能が生ずることになる。この支払取引の媒介者としての機能によって、銀行は無数に存在する貸借関係を集中してその決済を行うことにより、同一地域内においては勿論のこと、隔地間に存在する諸支払さえも、相互に決済され、経済活動が促進せしめられることになる。現在においては振替取引や為替取引や手形交換等においてその發展した形態をみる事が出来る。

銀行資本が貨幣取扱資本を端緒として貸付資本と結合して成立するに至ると、銀行機能はかつての単なる支払取引の媒介者としての機能のほかに、さらにあたらしい機能が加わることになる。すなわち貨幣取扱資本として活動している際に、それに対し保管、支払のために預託された貨幣の一部が常に滞留していることを、經驗を通じて貨幣取扱業者が知り、それをば後に貸付に利用出来ることを知るとともに、それを実践にうつすこととなった。更に後には貸付を行う為の必要から積極的に預金を蒐集し、それに対して利子をつけるという方法によって、貸付に利用出来る資金をあつめるようになった。ここに銀行機能としては、第二として、休息状態にある貨幣資本の積極的な蒐集とその機能貨幣資本への転化という機能が生ずることとなる。そして当初は貸付はまず手形割引という形態でなされたものが、後には、それにとどまることなく、いわゆる「資本貸付」の方向へ發展

して行くことになるのである。

さらに休息状態におかれた貨幣資本にとどまらず、第三に、其の他のあらゆる階級の所得にもとずく休息貨幣をも蒐集することによつて資金を充実し、それをば機能資本に転ずることになるのである。これは産業資本が発展し、所得の増大が生じてくるという資本主義社会の発展に照応するものである。

以上のようにして休息貨幣や休息貨幣資本は機能的貨幣資本に転化されることとなるが、機能資本への転化は、貨幣形態（狭義^④）においてか銀行券の形態でか、あるいはまた預金通貨^⑤の形態においてなされる。この場合貨幣形態でなされる銀行貸出は預金された貨幣のうちの滞留分によつて媒介的におこなわれるわけであるが、その場合でも、貸出された貨幣が流通の後に再び銀行へ預金され、更にそのうちの滞留分が再び貸出され得ること。このような反復的な経過をたどるならば、ここに、現存する貨幣量をこえて累積的に、単なる数字的存在としての預金額が形成されることとなる。

貨幣形態でなされる貸出のほかに銀行券の発行、預金通貨の形態での貸出が加わる。この場合には銀行券、預金通貨は銀行における貨幣形態での準備金を、制度的な基礎としてもっているわけである。それ故に銀行に滞留している貨幣はそれ自体として、すなわち貨幣形態において貸出されたり、さもなくば金準備として銀行券、預金通貨を制度的にささえる作用をすることになる。金準備額は貨幣形態での貸出の増大によつて減少することとなるが、貸出は貨幣形態だけでなく、其の他銀行券、預金通貨の形態でもなされる。その場合減少した金準備によつて銀行券、預金通貨が制度的にささえられていることになる。しかしながら、銀行券、預金通貨は取引を媒介して不用になれば再び銀行へ預金あるいは借入金金の返済という形で還流してくるわけであるから、金準備額

の減少と流通における銀行券、預金通貨の増大とは或程度まで併存可能である。

金兌換制度の停止とともに、準備金は貨幣金形態を内容とするものから、不換銀行券を大宗とするいわゆる現金をその内容とするものへと国内的には転化し、兌換制度のもとの貨幣金に対する銀行券、預金通貨の關係が不換制度のもとでは、不換銀行券に対する預金の關係へと転化する。そして不換銀行券は、根源的には中央銀行によつて社会に供給され、預金通貨は主として商業銀行によつて社会に供給され、不換銀行券を貸出す商業銀行は中央銀行の供給した不換銀行券を、中央銀行の代理者となつて、みずからの手を通して再び社会へ投入れることになる。そこで商業銀行での媒介的貸出は受入れた不換銀行券を貸出す場合にあらわれることになるが、その他の貸出はすべて創造的貸出といえる。このようにして中央銀行をふくめた銀行制度全体としては、けつきよく創造的貸出に転化することとなる。それにともなつて休息貨幣、休息貨幣資本の内容も貨幣金を意味するものからいわゆる現金を意味するものへと転化せざるを得なくなる。

かくして銀行は休息状態の貨幣（広義）や貨幣資本（広義）を媒介的に貸出すにとどまらず、第四に中央銀行をもふくめて銀行制度全体として貨幣資本—擬制的貨幣資本—をつくり出して社会に供給するに至るのである。

不換制度のもとにおける媒介的貸出も創造的貸出も共に、貸出すなわち銀行による擬制的貨幣資本の供給である点においては共通である。しかしながら媒介的貸出においては休息貨幣（広義）とか休息貨幣資本（広義）とかが銀行によつてあつめられて、そのうちで預金に対する一定の支払準備をのこしてその他の部分が貸付けられることになる。この場合貸出された現金がふたたび預金され、そのうちの一部分を銀行にのこして再び貸出されるならば、いわば預金—貸出—預金—貸出という反復を通じて預金残高の累積が生れ、現実に現金は貸出されて銀

行の手もとにはないのにもかかわらず、預金残高は巨大な数字を示すこととなる。この場合のように同一現金が幾回も預金―貸出―預金―貸出という反復を通じて、その結果生ずる預金の累積については、それを媒介するものは当初銀行へ預け入れられた休息貨幣や休息貨幣資本―現実的には現金―そのものにあおいでおり、その中で滞留分が貸出されることになる。しかしその眞の根源は中央銀行における発行にある。

これに対して造出的な貸出においては現金による貸出ではなく、貸出された資金が小切手によって流通する点に造出可能な原因がある。したがって預金の滞留がなくても貸出資金がすべて小切手で流通するならば、現金は必要をみないわけである。しかし時には現金によっても支払われる必要があるから、その分に対する準備を考慮しなければならぬ。この準備分は休息貨幣や休息貨幣資本の一部でまかなわれるけれども、それでもなお不足するときには現金の供給を中央銀行より得る必要が生ずる。中央銀行はこの要求にもとずいて、公債、手形を担保として現金を供給することになる。このときには小切手が流通せずに、それが現金に転形して流通することとなるが、けつきよくは貸出にもとずいて擬制的貨幣資本があたりしく社会に供給されたこととなる。このようにその形態が預金通貨であつても、また現金であつても、いずれにしても銀行は貸出によってあらたに貨幣資本を社会に供給することとなるのである。^⑧

六 銀行貸出に対する当事者の意識

すでにみたように銀行は貸出をするにあたって、休息状態にある貨幣や休息状態にある貨幣資本によってそれをおこない、さらにそのうえにみずからの信用によって擬制的貨幣資本を造出してそれをば供給するのである。

その際、銀行からの貸出はどのような形式でなされるにしても、すべて利子を徴収して貸出されるために、銀行にとっては資本として観念されている。他方、それを借入れる企業の側でも、借入れた資金をば現実には購買手段として使うのであつても、支払手段として使うのであつても、共にひとしく企業の継続的な活動のために必要な資金として、みずからの資本循環運動の中へ投入するわけである。それゆゑに企業においても貨幣形態で資本を借入れたものと観念せられることとなるのである。

七 貨幣資本増加供給の限界

銀行によつて供給される貨幣資本の額は、基本的には経済社会の要求に従属するわけであるけれども、まず供給者としての銀行の側から考察をはじめることにする。銀行制度全体としての供給可能な限界はつぎのように示される。すなわち現金預金を C 、現金準備率を r とするならば振替預金 X は $X = \frac{C}{(1-r)}$ であり、現金預金、および振替預金の両者をふくめた預金総額 $D = C + X$ である。このように、現金預金をはるかに超過して預金をつくり、それを貨幣資本として社会に供給出来るのは、造出分がかならずしも現金を必要とするものではなく、小切手で流通するところにその理由がある。現実において現金準備は銀行の手もと現金（小切手をのぞく）によつて形成されているのであるから、手もと現金がゆたかである一方、小切手流通が量的に大きな割合をしめるような状況のもとでは、貨幣資本の増加供給は極めて大きくなることが予想出来る。技術的にみた貨幣資本の増加供給の限界は以上のようなのであるが、それが技術的ではあつても一つの限界が考えられる理由は、銀行が現金準備として一定の現金を手もとに保有して、現金での払戻しに応じる態勢をそなえていることが必要であるからではあるが、

もし現金準備が不足するような時には、中央銀行からの貸出によって現金の不足はおぎなわれる筈であるから、貨幣資本の増加供給の限界そのものも打破されることになる。だから現実的な限界については他の角度から検討される必要がある。銀行の手もと現金を基礎として考えられる貨幣資本増加供給の限界は、いわば貨幣資本の供給者側での問題であつて、増加供給の可能性がどれ程であるかをしめすものといえる。これに対して現実に貨幣資本を需要して、再生産過程で利用するのは借手である企業の側であつて、供給者としての銀行の側においてよりも、むしろ需要者としての企業の側においてこそ、現実的な貨幣資本増加供給の限界は劃されるものといわなければならぬ。

銀行は貨幣資本の供給者として、その供給については現実的な限界を劃するものとはいえず、むしろ借入人としての企業の側の状況如何によつて、貨幣資本の供給についての限界が劃されるものといふことが出来る。

ただここで問題になるのは、企業が借入れた貨幣資本によつて現実資本が形成される場合もあれば、現実資本が形成されることなく、単なる支払手段として、債務の弁済のために支払われるにすぎない場合もあるということである。個別的企業の立場からみると、借入はすべて貨幣形態における資本の借入として觀念せられるけれども、他方社会的観点からみると、借入はある場合には、それによつて現実資本が形成されるという意味での資本借入(資本貸付)と単なる支払手段が借入れられるにすぎないという意味での貨幣借入(貨幣貸付)とに區別出来る。

再生産過程の拡大に関連をもつのは資本貸付として把握される場合の貸出の場合である。この場合には客観的な条件として第一に、現実資本に転形されるはずの資源と共に労働力が存在するということ、第二には、より根

本的な問題として、借入れられた貨幣資本によつて一定の利潤が獲得されるという見通しがあること、が必要である。このような条件がととのわれないとするならば、借入は企業にとつても、社会にとつても拡大の意味をもつことは出来ないのである。

八 独占資本による限界

資本貸付によつて再生産過程が拡大の意味を持ち得る可能性がある場合でも、その再生産過程自体が、資本主義の現実の段階では、国家の経済政策によつて干渉をうけており、国家干渉の浸透している再生産過程に対して貨幣資本を供給する銀行は、その根底において、経済政策、特に金融政策の影響から独立してみずから貨幣資本を供給するわけではない。貨幣資本の供給は、経済政策の一環としての金融政策に依存し、中央銀行をもふくめて、全銀行制度が国家の干渉の下にあるわけである。だから銀行機能を論議する場合においても、現段階では国家とのつながりを無視出来ないこととなる。しかしその国家そのものが、独占資本に奉仕するものであるかぎり^⑨は、けつきよく金融政策も独占資本の利益に合致したものとしてみせられざるを得ないし、独占資本の利害關係によつて、貨幣資本の増加供給はその量についても、その流れる方向についても、制約をうけ、限界づけられるものといえるのである。

① 信用媒介説の古典的主張者はJ・W・ギルバートである。彼は「銀行業者は借主と貸主との間に立つ媒介者である。彼は一方より借りて他方に貸す。そして彼が借る条件と貸す条件との間の差が彼の利潤の源泉となる。このようにして以前には個々人の手で不生産的であつた小額の貨幣をば活動的なものにし同時に商取引をおこなうために追加的資本を必要とする

- 者に融通する」と述べらる。J. W. Gilbert: *The History, Principles, and Practice of Banking*, Vol. 1 p. 210~211
- ② 信用代位説は信用置換説とも言われ、R・リーフマンによると「銀行は貨幣資本の所有者、すなわち債権者に対して自分の信用を債務者の信用と置換する。銀行は債務者の信用のかわりに自己の信用を活動させ、貨幣資本を債務者のために蒐集する。信用置換という言葉は、信用媒介という言葉よりも銀行業者が双方の側に向つて交換取引をするということを指示することより明確である。なかならず銀行が自己の計算で取引することが明確である」というのである。しかし、この場合でも根本的には銀行が債権者と債務者の中に介在することによつて媒介的な活動することを認めていない訳ではない。この他高木暢哉「銀行通論」一八〇頁にリーフマンに対する批判的見解がみられる。
- ③ 信用創造説の古典的主張者はH・D・マクロードである。彼は「銀行および銀行業者の本質と本性は、実に要求払の信用を創造して発行することである。しかもこの信用たるや流通し且つ貨幣のすべての機能を果たすものである。それ故に銀行は貨幣を借り貸しするための店舗ではなく、それは信用の製造所である」(Macleod: *The Theory of Credit*, vol. II, p. 364)とのべて銀行の創造的活動を強調した。信用創造説は後にA・ハーンによつてうけつがれ発展させられた。
- A・ハーンについては本稿二で取扱うこととした。
- ④ A・ハーン「銀行信用の国民経済的理論」(大北訳) 六五頁
- ⑤ 同 書 七一頁。
- ⑥ 同 書 六六頁。
- ⑦ 同 書 六五頁。
- ⑧ ヒルファードング「金融資本論」(林要訳) 一三二頁。Hilferding: *Das Finanzkapital*, p. 89
- ⑨ 同 書 一二九頁。Ibid., p. 88
- ⑩ 同 書 一三〇頁。Ibid., p. 88

⑪ 同 書 一三〇頁。Ibid., p. 88

⑫ 立命館経済学第二巻第四号。拙稿「利子生み資本の変容」

⑬ ここにいう休息貨幣資本と休息貨幣とは區別して理解される必要がある。すなわち、休息貨幣資本とは休息状態におかれ

た貨幣資本のことであつて、それは資本が運動をつづける過程の中から不可避免的に生ぜざるを得ない休息部分なのである。

すなわち $G-W \begin{matrix} P \\ \swarrow \\ A \end{matrix} \dots P \dots W-G$ という資本の循環運動の中で企業が継続的に活動をつづけて行くときには常に固定資

本の将来の更新のことを考慮に入れなければならない。この分は販売した代金の中から逐次積立てられることになるし、

これは企業活動の継続のためには欠くことの出来ないものである。さらに流動資本についても、労賃、原材料等に支払を

する場合に支払われる時には貨幣資本は支出されるけれども、その支払がなされる時までは一定期間、貨幣形態のまま

待期しているわけである。そしてそれは活動する時期に到るまで、休息しているものといえる。さらにまた、これらの流

動資本部分に相当する分に対して支払がおこなわれた後には、商品の売上代金が流入して来て、それは一時休息している

状態におかれることになる。このように企業活動にとつて、休息状態におかれざるを得ないとこの貨幣形態をとつた資

本は、さけられないし、社会全体としては、このような休息貨幣資本は巨額に達するものである。これに反して他方では、

あたらしく企業をおこすとか、従来の企業の拡大を試みようとするものも存し、それらは自己の支配に属している休息貨

幣資本のみでは不足を感じ、貨幣資本の供給を熱望する企業も多く、その額も社会全体としては巨額に達する。この需要

を満足させるために、一方における休息貨幣資本をあつめて、これを需要者に提供して機能資本たらしめ、資本の価値増

殖の使命を、供給者需要者の双方に対して可能ならしめ、利潤の入手を可能ならしめるものこそ銀行であり、このように

して銀行は、もし銀行がなかったならば休息状態のままにおかれるかもしれない貨幣資本をば、機能資本に転ずることに

よつて、社会全体として休息状態の貨幣資本を縮小するものである。

これに対して休息貨幣とは、前述のような資本の循環運動の中から不可避免的に生ずるものではなく、労働者、その他の

銀行機能の史的展開（小牧）

所得のうちで消費されるまで待期しているような状況にある貨幣である。これは資本として存在するのではなく、所得の一部分がいまだ使用されてはいないが、いずれ使用されるまでのその期間、休息している部分であつて、資本の循環運動の中にあるわけではない。だからその意味で休息貨幣資本と区別して理解される必要がある。この休息貨幣は個々については極めて僅小であつても、それが大量にあつめられると巨額なものとなり、資本としての作用をなしうる程の大きさに達することとなるから、それが機能資本として銀行の手を通じて資本家階級の管理にゆだねられることとなるのである。

- ⑭ 狹義における貨幣とは貨幣金をさすものである。立命館経済学第三卷・第五号、拙稿「貨幣資本の造出とその限界」註4 同 右

- ⑮ 国内的にはともかくとして国際的流通においては、貨幣金はそれ自体価値物として、国際間の貸借の決済において作用しつづける。

- ⑯ 現金というのはヒルファディングのいう「完全価値ある金属貨幣、本位貨幣、金貨または銀貨に加うるに強制通用力ある国家紙幣ならびに補助貨幣」のほかには不換銀行券（実質的には紙幣）を加えたすべてのものをいうのである。

- ⑰ 銀行が貨幣資本を供給する場合、時には現金で、時には小切手で流通する預金通貨の形態で、それを与えることとなる。そこで現金と預金通貨との関係を明かにしておく必要がある。

元来預金通貨と称せられるものは歴史的には手形流通にその基盤をもつものであり、兌換銀行券と本質的に相違をみない。すなわち私人手形にかわつて銀行が自己の社会的信用にもつづいて兌換銀行券を發行するかわりに、その分を貸方記入して成立するものが預金通貨である。銀行券が貨幣の支払手段機能の發展において成立するのと同じように、預金通貨も貨幣の機能としては支払手段機能にその成立の根底をもっている。ただ兌換銀行券は發行と同時に流通界へ入つて行くことになるが、これに対して預金通貨の場合には、預金として一たん貸方記入されたものが小切手という移転用具を媒介として流通界に入つて行くことになる。かくして銀行よりの貸出は、兌換銀行券もしくは小切手の形態において流通界に

において支払手段、購買手段として作用することとなる。ところでその後、兌換銀行券は不換銀行券に化し、実質的には紙幣に転落した。かくして現在では不換銀行券は、補助貨幣とともに現金として考えられている。そこで銀行よりの貸出は、現金でなされるか、それとも小切手で流通する預金通貨の形態でなされる、ということになった。預金通貨は小切手で流通する預金部分にあたるわけであるが、小切手は顧客の要求により時に現金化されることもしばしばある。そこで兌換銀行券が不換銀行券に化して、それが現金として視念されるのに対応して、かつての小切手のもっていた兌換銀行券的な性格——小切手が兌換銀行券に転形し、それが更に金に兌換される——も消失し、小切手は不換銀行券の性格——小切手がそれ自体として使用されないときには不換銀行券に転形されて使用される——を帯び、小切手の現金への転形の可能性に閃連して、預金に対する現金準備の問題が生じて来た。そこでかつての兌換銀行券に対する貨幣金の関係が、現在では預金に対する現金準備という形態へと変化して来たものといえる。いわば現金準備の内容が貨幣制度の変化——金兌換制度の停止——によって、国内的には貨幣金から不換銀行券（実質的には紙幣）とか補助貨幣とかか補助貨幣をさすものといえる。ここで、現金というは、現在の意味での現金をさし、具体的には不換銀行券とか補助貨幣をさすものである。

①9 国家とは特定の財産関係から利益をうける社会階級ないし諸階級の生んだものであり、……階級構造それ自体の安定性を強制し、保証するための支配階級の手にある道具である。スウィーシー「資本主義発展の理論」邦訳、三三一頁、三三二頁。P. M. Sweezy: *The Theory of Capitalist Development*, p. 242, 243